

「V着」と＜Vテイル＞の対照研究(三)

時 衛国

要旨：本研究は中国語の「着」と日本語の＜テイル＞について、運動と存在を表わす場合を中心に、その意味機能と文法的特徴を明らかにしたものである。

中国語の「着」と日本語の＜テイル＞は、能動表現における動的状態と静的状態をいずれも表現することができるという点では、大体共通しているが、しかし、受動表現における動的状態と静的状態を表現することができるかどうかという点では、中国語は日本語と大きく違っている。「着」は能動表現における動的状態と静的状態のいずれも表現することができるが、しかし、受動表現における動的状態の達成と静的状態の受動を表現することができない。文法的特徴として能動表現における動的状態と静的状態の描写に力点が置かれている。それに対し、＜テイル＞は能動表現にも受動表現にも用いられ、動的状態と静的状態の持続をいずれも表現することができる。受動の状態も視野に入れ、しかも大きな射程を有している。ただし、動的状態の達成と達成後の結果を表現することができない。

1. はじめに

中国語の「着」と日本語の＜テイル＞¹⁾ はいずれも、運動・存在を表わすことができる。たとえば、

- (1) 往黑板上写着字。(黑板に字を書いている)

(2) 黒板に字を書いている。

(3) 黒板上写着字。(黒板に字が書いてある)

(4) 黒板に字が書いてある。

(1)(2) は運動、(3)(4) は存在を表わすと思われる。ただし、(4) は<テイル>ではなく、<テアル>によって表現されている。運動を動的状態の持続、存在を静的状態の持続として表現することができるという点では、中国語と日本語はほぼ共通しているが、しかし、(6) のように受動表現にも用いることができるという点では、両言語には差異がある。

(5) ×黒板上被写着字。(「黒板に字が書かれている」の意)

(6) 黒板に字が書かれている。

「V着」と<Vテイル>はどのように運動と存在を表わし、どのような共通点と相違点があるのか、そして、文法的にはどのような特徴を持っているのか。両語の持つ意味機能を明らかにするには、対照研究の観点から考察する必要があると考えている。本研究は「V着」と<Vテイル>の意味機能と文法的特徴について、運動と存在を表わす場合を中心に、これまでの先行研究を踏まえながら考察し、両者の共通点と相違点を究明することとする。

2. 先行研究

「着」については、李臨定 1985・1986、陈平 1988、徐丹 1992、戴耀晶 1994・1997、菅谷有子 1996、刘一之 2001、吴卸耀 2006、王学群 2007、高桥弥守彦 2007、丸尾誠 2007 などの研究があるが、しかし、「主語＋V着＋目的語」という構造についてはあまり述べられていない²⁾。一方、存在を表わす「場所語＋V着＋目的語」という構造については、研究が多数ある。その中で、李臨定 1986 は「場所語＋V着＋目的語」という存在を表わ

す文型を八種類に分類した上で、これらの文型はいずれも「着」と共起し、おおむね静的状態を表わすものが多いが、中には動的状态を表わすもの（「飄（漂う）」「飛（飛ぶ）」「走（歩く）」「跑（走る）」など）もあり、主に情景描写に用いられると述べている³⁾。また、陈平 1988 では場所を表わす動詞として、「坐（座る）、站（立つ）、躺（寝る）」、「挂（掛ける）、包（包む）、摆（並べる）、貼（貼る）」などが挙げられている。この種類の動詞は「着」を付けると、「坐在台上（演壇上に座る）」「在台上坐着（演壇上に座っている）」のように動的状态と静的状態のいずれも表現できると述べている。しかし、「往墙上挂着～（壁に～を掛けている）」という表現については言及されていない⁴⁾。

<テイル>については、奥田靖雄 1978、仁田義雄 1982、工藤真由美 1995、中畠孝幸 1999、飯嶋美知子 2004 などがある。これらの研究は主として「主語＋目的語＋Vテイル」という能動表現について考察しており、参考になるものであるが、「場所語＋対象語＋V受動形＋テイル」と「場所語＋対象語＋Vテアル」という構造についてはあまり述べられていない。「場所語＋対象語＋Vテアル」という構造については、寺村秀夫 1984、益岡隆志 1987、杉村泰 1995、斎藤茂 2007・2012、李京保 2007 などの研究がある。寺村秀夫 1984 はこれについて、眼前の状態を描写する場合と現在の状況を述べる場合に分けて説明している。一方、益岡隆志 1987 は寺村秀夫 1984 を踏襲し、さらに深く考察している。運動と存在を表わす表現形式は多種多様であり、各表現形式の意味機能を究明するには、相互の関連性を視野に入れて考察するのが効果的なのではないかと思われる。ところが、従来の研究では、「主語＋目的語＋Vテイル」と「場所語＋対象語＋V受動形＋テイル」と「場所語＋対象語＋Vテアル」との三種類の文型について相互の関連性・表現の論理性などの観点からは考察されてい

ない。

3. 分析

本研究は、運動と存在を表わす場合、「着」と〈テイル〉がそれぞれ、どのように動的状態と静的状態を表わしているのか、また、それぞれの表現形式とどのような関連を持っているのかについて考察し、運動と存在のあり方を明らかにすることとする。

運動は始動・持続・終結という三局面を含む運動過程があり、最後の局面いわゆる終結の局面に来ると、結果が生まれ、静的状態として存在することになる。運動は動的状態を表わすのに対し、結果は静的状態を表わす。ただ結果は運動による結果と単純な結果がある。前者は運動と連関があり、結果になる直前の段階もその直後の段階も想定できる。しかし、後者は単純な結果として運動との連関は想定できない。

本研究では考察の便宜上、「(主語+) 場所語+V着+目的語 (往墙上挂着地图)」「(主語+) 場所語+目的語+Vテイル (壁に地図を掛けている)」を能動表現と呼び、3.1.において述べることとする。「場所語+V(他動詞)受動形+テイル (壁に地図が掛けられている)」を受動表現と呼び、3.2.において述べることとする。また、〈テイル〉との違いを追究するため、「場所語+対象語+Vテアル (壁に地図が掛けてある)」という構造も 3.2.と 3.3.において適宜取り上げる。なお、本研究は主として、「挂/掛ける」「贴/貼る」のような運動と存在を表わす動詞を考察の対象として取り上げている⁵⁾。

3.1. 能動表現における運動

中国語の「着」と日本語の〈テイル〉は、「挂/掛ける」「摆/並べる」「放/置

く「陈设/飾り付ける」「貼/貼る」「堆/積む」「包/包む」という種類の動詞を捉えることができるという点では、両語は大体共通しているが、文法上の独立性が持たれているのかどうかという点では、「着」は<テイル>と違って

(7) 往墙上挂着地图⁶⁾。(壁に地図を掛けている)

(8) 壁に地図を掛けている。

(9) 往黑板上写着字。(黑板に字を書いている)

(10) 黑板に字を書いている。

中国語では、「着」は「動詞+着+目的語」という構造を取る場合、動的状态の持続と静的状態の持続の両方の意味を表わすことができる。つまり、そのままでは必ずしも動的状态の持続を表わすとは限らないということである。たとえば、「挂着地图」「写着字」となると、「地図を掛けている」「字を書いている」という動的状态の持続の意味を表わす他、また「字を書いたままになっている」「ずっと地図が掛かっている」という静的状態の持続の意味をも表わすことができる。「墙上挂着地图」「黑板上写着字」のように、「着」は静的状態の持続を表わすことになるから、「挂着地图」「写着字」は、「墙上挂着地图」「黑板上写着字」における「墙上」「黑板上」という場所語が省略された表現とも理解されるし、また、目に見える形で存在する状態を表わすものとも思われる。これは「着」が動的状态と静的状態に対していずれも描写性を有するからである。しかし、(7)(9)のように「往墙上」「往黑板上」という「介詞(助詞相当、以下同じ一筆者)+場所語」からなる連用修飾語が用いられた場合、「着」の動的状态の持続という意味がその連用修飾語によって導き出され、いわゆる動作・行為の進行中という意味を表わすことになる。また、「正挂着地图」「正在挂着地图」「正写着字」「正在写着字」といった表現のように、「正」「正在」などの副詞と共起する場合も、「着」におけ

るその動的状態の意味(を表わす側面)はそれらの副詞によっても導き出され、動的状態の持続を表わすことになる。

(7)(9)は動作主が省略されている能動表現だが、介詞の「往(へ/に)」が「往墙上/往黑板上(壁に/黑板に) + V着」の形で用いられており、動作・行為が行われる場所として明示されているので、動的状態の持続を表わすことになる。なお、「往(へ/に)」のかわりに、「在(で/に)」が用いられることもある。「往(へ/に)」は方向を表わす介詞であるのに対し、「在(で/に)」は場所を表わす介詞である。

(7)は、動作主が壁に地図を掛けているところだ、という動的状態(動作・行為)の持続を表わしているのに対し、(9)は、動作主が黑板に字を書いているところだという動的状態の持続を表わしている。そして、これらはいずれも能動表現として、捉えられた時点で動的状態が持続中だということを示している。というのは、動作主が現れなくても、「介詞+場所語」という修飾語によって、動的状態を表わすことになるからである。この場合は「着」は動作主がどこかである動的状態を持続させていることを表わし、動作主が能動的に行動していることを強調している。

ところが、従来の研究では、存在表現⁷⁾における用法については述べられているが、能動表現における用法についてはあまり述べられていない。また、密接な関係にある存在表現と能動表現の関連性についてもほとんど述べられていない。前述の通り、能動表現では、「動詞+着+目的語」という構造は、動的状態の持続より静的状態の持続のほうに比重が置かれている⁸⁾。そのことが、従来の研究では存在表現として捉えられていて、動的状態の持続を表わすという点については述べられていない原因の一つなのではないかと考えられる。

<テイル>は、能動表現に用いられ、「掛ける」「書く」⁹⁾などの動詞に接

続し、動的状態の持続を表わすことができるという点では「着」と共通している。しかし、「地図を掛けている」「字を書いている」のように、連用修飾語に助けを借りずに、動的状態の持続を表わすことができるという点では、「着」と違っている。日本語では、「掛ける」「書く」などの動詞は、「地図を掛ける」「字を書く」のような「目的語＋述語」という構造の場合はもとより、「掛けている」「書いている」のように動詞に<テイル>を付ける場合も、動的状態の持続を表わすことができる。これは「掛ける」「書く」などが動詞として<テイル>を付けるという点において文法上の独立性が認められており、また文法的機能もよく働かせることになるからであると言える。この点では中国語と大きく違っている。この種類の動詞は<テイル>を付けることによって、動的状態の意味をより鮮明に表現することができるようになる。<テイル>は文法上、独立性が認められ、他の修飾語がなくても、単独に動的状態の持続を表現することができると言える。この点では「着」と異なっている¹⁰⁾。

(8)(10)では<テイル>は(動作主が)壁に地図を掛けたり、黒板に字を書いたりしている最中だという動的状態の持続を表わしており、動作主の働きかけで実現されているその動的状態を表わしていると思われる。これは能動表現として、「掛ける」「書く」という動的状態が持続しており、まだ終わっていないという段階にあることを示している。

このように文法上の独立性の有無による能動表現、運動を表わすことができるかどうかという点では大きく違っているところと言える。また、副詞やその他の語句に助けを借りなくても動的状態の持続を表わすことができるという点においても大きく違っている。「着」は文法上の独立性に欠けているから、「介詞＋場所語」という連用修飾語や「正」「正在」などの副詞を必要とすることになる。一方、<テイル>は文法上の独立性が強いから、

「着」のように連用修飾語や副詞などを必要とせず、また、目的語を取らなくても動的状态の持続を表わすことができるという意味機能を有するという点では、「着」と違っている。

3.2. 受動表現における運動

「着」と<テイル>は、受動表現においても運動を表わすことができるかどうかという点で、大きく違っている。

(11)×被往墙上挂着地图。(「壁に地図が掛けられている」の意)

(12) 壁に地図が掛けられている。

(13)×被往黑板上写着字。(「黑板に字が書かれている」の意)

(14) 黑板に字が書かれている。

中国語では、「着」は受動表現に用いることができる。たとえば、「群山被雪覆盖着(山々が雪に覆われている)」のような静的状態を表わす場合にも、また「犯人被警察拽着(犯人は警察に引っ張られている)」のような動的状态を表わす場合にも、受動表現に用いることができる。しかし、「×他被表扬着(「彼が褒められている」の意)」「×他的能力被证明着(「彼の能力が証明されている」の意)」における「表扬(ほめる)」「证明(証明する)」のように動詞の中で大多数を占める行為・動作を表わす動詞に接続することができない。このことから、「着」は受動表現に用いられる場合、主として限られた動的状态と静的状態しか表現することができず、一般的な動的状态や静的状態も視野に入れることができないと考えられる。(11)(13)のように、受動表現では、「往墙上挂着地图」「往黑板上写着字」という動的状态の持続の意味が表現できないので、その表現形式は認められないのである。

中国語では、「覆盖(覆う)」「笼罩(立ちこめる)」「拽(引っ張る)」「拉(引く)」など、相手に対し物理的に、そして肉体的な行為によって、何らかの

影響を与えるような内容の動詞だけが、受動表現を成立させることができ、その他の意味を表わす動詞は受動表現が成立しないのである。このように、中国語では受動表現に用いられる動詞は、非常に制限されており、受動表現によっては動的状态の持続を表現することができないと言える¹¹⁾。

<テイル>は受動表現においても動的状态の持続を表わすことができる。(12)と(14)では、<テイル>は、それぞれ「掛ける」の受動形「掛けられ」と「書く」の受動形「書かれ」を受けることによって、発話者ではなく、だれか(第三者)によって掲げられたり書かれたりしていることを表わしている。この場合は、ガ格を取ることによって、動的状态が持続しているという意味のほか、また静的状態が持続しているという意味も、前後の文の内容によっても表わすことができる。ガ格は客観的な存在を表わすから、ヲ格の場合に比べて、さらに強い描写性を有するものと考えられる。ただし、動的状态としての動作・行為の意図性は認められるものの、動作主による他動性は失われてしまい、その代わりに結果性は持たれていることになる。しかし、<テアル>におけるような達成性は付与されていない¹²⁾。また、ガ格のかわりに、主語に立つ時も、「地図はもう壁に掛けられている」「字はもう黒板に書かれている」のように、自然な受動表現として成立する¹³⁾。

ところが、<テイル>は「??壁に誰かに(よって)地図を掛けられている」「??黒板に誰かに(よって)字を書かれている」のように、ヲ格を取ると、客観的な状態ではなく、動作主による強い他動性・意図性が意識されることもあり、非常に不自然な感じを受ける。ヲ格はガ格と比べれば、他動性・意図性が強いという一方、描写性が弱いから、受動表現には不適合となると考えられる。

<テイル>は受動表現に用いられる場合、動的状态と静的状態のいずれ

も捉えることができるという点では中国語の「着」と共通しているが、しかし、(12)(14)のように、同じ表現形式によって動的状态の持続と静的状態の持続をいずれも表現することができるという点では「着」と大きく異なっており、日本語ならではの意味機能と考えられる¹⁴⁾。

このように、日本語では格の支配が著しく、受動表現の成立にもそれが影響を与えることになり、また、格助詞の置き換えに対しても影響をもたらされることになる。また、受動表現は、客観的な動的状态の持続を表現し、支配性の強い格助詞による動的状态への支配を受容しないものだと考える¹⁵⁾。

<テイル>はこのように助動詞「レル・ラレル」と共起し、受動表現における動的状态と静的状態の持続を表現することができるから、「着」より応用範囲が広いと言える。また、このことは日本語においては形態組織が発達しているので、その文法的機能を十分に働かせることができるということができる。

受動表現は能動表現と比べれば、客観性と状態性が認められ、動的状态の持続と静的状態の持続を共に表わすことができるので、言語表現上の広がりを持つものと見られる。ガ格よりヲ格のほうが自然な日本語として認められにくい。<テイル>は受動表現においては、特に動的状态と静的状態のいずれも表現することができるという点については、能動表現と異なって、受動表現が可能であると言える。

日本語では、<テイル>には、このように受動表現における動的状态の持続を表現することができるという文法上の機能が持たれており、動的状态の持続に対する描写の機能を付与されている。この点では中国語と大きく異なっている。

3.3. 運動の達成と結果

「着」と<テイル>はどちらも、能動表現には用いることができるものの、ある動的状態（動作・行為）の達成を表わすことができないという点では、両語は共通している。たとえば、

(15) ×往墙上挂好着地图。（「壁に地図が掛けてある」の意）

(16) 往墙上挂好了地图。（壁に地図が掛けてある）

(17) ??壁に地図を掛けてある。

(18) もう壁に地図を掛けてある。

(19) ×往黑板上写好着字。（「黑板に字が書いてある」の意）

(20) 往黑板上写好了字。（黑板に字が書いてある）

(21) ??黑板に字を書いてある。

(22) もう黑板に字を書いてある。

能動表現においては、通常、ある動的状態（動作・行為）が実現された後、それなりの結果が出てくることになる。その結果は単純な結果ではなくて、発話者や動作主の意図が反映された動的状態の結果と考えられる。つまり、その結果は意図的に働きかけられた前提が想定できる。ところが、「着」と<テイル>はいずれも意図的に設定された動的状態の結果を表現することができない。

「着」は動的状態の持続を表わすことができるが、しかし、動的状態の達成性が持たれていないため、意図的な動的状態の結果を表わすことができない。中国語では、意図的な結果を表わす場合は、「好（～上げる）」¹⁶⁾は補語として動詞の後に来て、「往＋場所語＋V＋好＋了＋目的語（場所語＋目的語＋モウV＋テアル）」¹⁷⁾のような構造の文で用いられることになる。これは「好（～あげる）」が動的状態の達成性を持っているからである。

なお、意図的な結果を表わすものとして、この他に「完（～終わる）」があ

る。「完（～し終わる）」には終結性があり、「V+完（～し終わる）」のように用いられ、動的状态の終結を表わすが、しかし、達成性は持たれていない¹⁸⁾。そして、「完」と「好」はいずれも意図的な結果を表わすことができるという点では共通している。「完」は主として動作過程を意識しながら、動的状态が終結の局面を迎えていることを強調するが、しかし、満足な結果になっているかどうかは視野に入っていない。それに対し、「好」は動作過程を意識するというより、動的状态が終結の局面に来ており、完全に出上がったその結果に対し満足だということを表わし、目標が達成されているという意味を表わしている。

たとえば、「好」は(16)(20)では「掛ける」「書く」という動的状态の完成を強調し、その結果が良好であることを表わしている。もし「完」に置き換えられ、「往墙上挂完了地图（壁に地図を掛け終わった）」「往黑板上写完了字（黑板に字を書き終わった）」のように表現された場合、動的状态の終結を表わすだけの表現に止まり、目標達成の有無、結果の如何を判断しているわけではない。また、この場合も、「×被往墙上挂{好/完}了地图（「壁に地図を掛けられている」の意）」「×被往黑板上写{好/完}了字（「黑板に字を書かれている」の意）」のように、「好」と「完」はいずれも受動表現には用いることができない。

一方、日本語では、＜テイル＞は受動表現において、動的状态の結果としての静的状態の持続を表現することができるが、しかし、話者の満足のある結果を表わすことができないから、達成の結果を表わす場合は、＜テアル＞によって表現されることになる¹⁹⁾。(17)(21)における＜テアル＞は動作主の働きかけによる結果を視野に入れ、動的状态から静的状態への移行の表現になっている。この場合は、「掛けてある」「書いてある」はいずれもヲ格を取っていることもあり、自然な表現とは言えない²⁰⁾。他動性・意

図性のほか、さらに達成性も持たれているはずだが、結果として客観的な性格を有することが求められ、ヲ格は構文として落ち着かないのである。これに対し、「壁に地図が掛けてある」「黒板に字が書いてある」のようにガ格を取った場合は、他動性と意図性が薄くなり、達成性もあまり感じられないが、ただ結果性が認められるものと考えられる²¹⁾。

<テイル>も運動の結果と存在を表わすことができるが、しかし、「壁に地図が掛けている」「黒板に字が書いている」のように、「掛ける」「書く」は、他動詞としてそのままではガ格を取ることができない。そして、前述のとおり、「壁に地図が掛けられている」「黒板に字が書かれている」のように受動表現になる場合は、受動性という側面のほか、また結果性という側面もあると考えられる。ただし、ヲ格を取っているので、どちらかというところ、動的状态の持続を表わすその受動性の側面が強くなるが、静的状態として存在するその結果性の側面が弱いものと思われる。

一方、それと反対に、ガ格を取り、「壁に地図が掛けられている」「黒板に字が書かれている」のようになる場合は、動的状态の持続を表わすその受動性の側面が弱くなるが、静的状態として存在するその結果性の側面が強くなる。後者の場合は意図性があまり持たれていない代わりに、描写性は強くなるから、結果としての静的状態の描写に用いられることになる。

しかし、<テアル>²²⁾ はヲ格を取っていることもあり、意図性と達成性を含むものと思われ、また結果性も認められる。たとえば、(18)(22)のように、<テアル>は動作主による「掛けよう」「書こう」という意図性が認められ、また、動的状态が実現し、目標達成の段階にある「掛けてある」「書いてある」という達成性も認められる。そして、動的状态が実現した直後の段階に達している「掛けてしまっている」「書いてしまっている」という結果性も認められるべきである。

また、〈テアル〉は (12)(14) のように、受動表現と共起することができるが、しかしガ格を取らなければならない。(12)(14) の場合は、〈テイル〉は発話者では他人による「地図を掛ける」「字を書く」という動的状态が持続しており、それを自分なりの立場から捉えていることを強調している。そして(18)(22)の場合は、〈テアル〉は達成した状態が持続していることを意図的に示している。ところが、「??壁に地図を掛けられてある」「??黒板に字を書かれてある」のようになると、ヲ格の支配が著しいため、受動表現における受動性と能動表現における達成性が調整できなくなるから、共起することができない。しかし、ガ格をとれば、自然度が増すことになる。達成時の状態はすでに固まっており、流動的ではないという性質があるため、支配の意味を与える〈ヲ〉よりも、落ち着きの良い〈ガ〉によって表現しやすいのではないかと考えられる。この点については、従来の研究ではあまり取り上げられていない。

類義表現として、「壁に地図が掛けられている」「壁に地図が掛かっている」という表現があるが、「掛けられている」は前述の通り動的状态の持続の意味のほか、また静的状態の意味の持続をも表わすが、たとえ後者の場合でも、動作完了後の結果と見られても、話者の意図が実現された満足的な結果になっているのかどうかは視野に入らない。一方、「掛かっている」の場合も結果として示されており、ただ話者の満足の有無の結果としては示されていない。それで、〈テアル〉によって達成性が付与され、話者の満足感を表わすことになるのである。

このように意図性と達成性を持つという点では、〈テアル〉は〈テイル〉と異なり、中国語の「好」とよく似ている。〈テアル〉の働きは、動的状态の持続から静的状態の持続への移行の段階に位置する、その状態の多様性を強調し、動的状态の結果としての静的状態になる直前の段階を表わ

すことになると考えられる。

<テアル>については、多くの研究が積み重ねられている。寺村秀夫 1984 は <テアル>の構文を次の二種類に分類している。

眼前の状態を描写する場合 (85) 壁ニ絵ガカケテアル²³⁾

現在の状況を述べる場合 (87) 先方ニハモウソノコトヲ話シテ
アリマス

氏は「眼前の状態を描写する場合」については、「ある目的のための準備という意味合いは、アル場合もあるが、ない場合のほうが多いようである」と、「現在の状況を述べる場合」については、「その処置が、あることに対する準備という意図であるものであるという意味合いが強くなる」(P151)と述べている。この記述は適切だと言えるが、しかし、二者が有機的な構造にあり、相互に関連しているという点についてはあまり述べていない。

益岡隆志 1987 は形式的な側面と統語的観点から<テアル>をA型とB型の二種類に分類し、さらに下位分類(四種類)も行なっている。「A型」は「(対象)ガ～テアル (動作主は抑制される)」、「B型」は「(動作主) ガ (対象) ヲ～テアル」という構文構造であり、全体共通する意味としては「意志的行為の結果に重点が置かれる<結果相>の表現」と述べている。

しかし、従来の研究では<テアル>の諸表現形式の相互関連については論理的に説明されているとは言えない。「(動作主)(ガ)+(対象)ヲ～Vテアル」は、動作主または話者による制御可能な動的状態の達成を表わすので、行為描写文(益岡 1987 参照)である。それに対し、「(対象)ガ+Vテアル」は前者の結果としての静的状態を表わすので、情景描写文(益岡 1987)である。前者と後者は動的状態と静的状態を描写するという点では共通しているが、見える形で描写するかどうかという点では違っている。二者は論理的な関係にあり、それぞれ違った局面を表わすことになる。また、<テア

ル>は能動表現だけでなく、受動表現にも用いることができるという点については、従来の研究ではあまり述べられていない。受動表現に用いられる場合は、「壁に地図が掛けられてある」「黒板に字が書かれてある」のように、<テイル>とは異なり、他人の行為による結果としての終結の意味を表わすことになる²⁴⁾。一方、<テイル>は受動表現に用いられる場合、終結と未終結の両方の意味を表わすことができるという点については前述のとおりである。

このように、<テアル>は能動表現においても受動表現においても、結果の存在を表わすことに重きが置かれているが、<テイル>は能動表現では、他動詞の場合は動的状态の持続、自動詞の場合は静的状態の持続を表わすことができるが、受動表現では、動的状态の持続と静的状態の持続をいずれも表わすことができる。ただ受動表現においては、存在なのか持続なのかははっきりしないといった一面があると思われる。それに対し、<テアル>は結果の存在を明確に表わすことができる。

4. まとめ

中国語の「着」と日本語の<テイル>は、運動と存在を表わす能動表現に用いられ、動的状态と静的状態をいずれも表現することができるという点では、両言語は大体共通しているが、しかし、受動表現において運動を表わす場合、大きな制限を受けることになり、また、動的状态の達成と静的状態の受動を表現することができないという点では、中国語は日本語と違っている。

「着」は能動表現において、動的状态と静的状態をいずれも表現することができるが、しかし、受動表現には用いることができず、動的状态の達成も表現することができない。また、受動表現における運動も何か影響を与

えるような場合でなければ、表現することができない。能動表現における運動と存在の描写に重点が置かれている²⁵⁾。

<テイル>は能動表現における動的状態と静的状態はもとより、受動表現における動的状態と静的状態も表現することができるので、様々な状態を視野に入れ、しかも大きな射程を有しているが、ただし、動的状態の達成と達成後の結果を表現することができない、そして、動的状態の達成と達成後の結果を表わす働きは<テアル>によって担われることになる。<テイル>と<テアル>は文法的に相互補完的な関係にあるものと考えられる。

	動的状態	←-----→	静的状態	
能動表現	運動	-----→	達成	→ 結果 → 存在
	○着		×着(○好)	×着 ○着
	○テイル		×テイル	×テイル ○テイル
			○テアル	○テアル
受動表現	運動	-----→	達成	→ 結果 → 存在
	△着		×着	×着 ×着
	○テイル		×テイル	○テイル ○テイル
			○テアル	○テアル

注

- 1 本研究では、中国語の考察語は「 」、日本語の考察語は< >で示す。例文に挙げられた考察語については下線を引く。以下同じ。

- 2 両語についての成果は多数あり、ここで一々取り上げる余裕がないので、本研究と関係のある文献だけを紹介する。また、参考文献として挙げられている論文も最小限に留めた。
- 3 ここでは先行研究を振り返るため、ごく簡単に紹介する。関連の論文については具体的に考察するとき取り上げることにした。以下同じ。
- 4 丸尾 2007 にも言及がない。また氏は「他在墙上挂着一幅画（彼は壁に一枚絵を掛けている/（彼の部屋では）壁に絵が一枚掛けてある）」「他在书架上摆着很多书（彼は本棚にたくさん本を並べている/（彼の部屋では）本棚に本がたくさん並べてある）」を非文としている。詳しくは氏の論文（同 P 120）を参照されたい。
- 5 運動表現と存在表現の違いを理解するには、「挂/掛ける」「貼/貼る」のような運動と存在をいずれも表わすことのできる動詞を考察するのが最も効果的だと思われる。
- 6 ここに挙げた中国語の作例の共起可否については、筆者の語感によるものであるが、日本語の作例の共起可否については日本人話者に実施したアンケート調査の結果によるものである。なお、本研究における例文と関係のある作例についてもそのデータを取ったので、参考のため、注の終わりに示しておく。参照されたい。
- 7 存在を表わす構文で、これに関する先行研究も多く見られる。これについては本研究の 3.3. において述べるので、参照されたい。
- 8 この種類の動詞が二重性を持つという点については、刘宁生 1985、戴耀晶 1994 に記述がある。詳しくは両氏の論文を参照されたい。
- 9 工藤真由美 1985 では主体の動きを表わす動詞として分類されている。詳しくは氏の論文を参照されたい。
- 10 日本語では静的状態の持続を表わす手段は他にもあり、〈テイル〉は主と

して動的状態の持続を表わすことになる。

- 11 「着」と受動表現との関係については、時衛国 2014「「着」と＜テイル＞の対照研究(四)」で考察しており、参照されたい。
- 12 たとえば、「黒板に字が書いてある」のように静的状態として捉えることができるが、しかし達成性が認められるので、動的状態の結果（存在）を表わすことになる。
- 13 ただし、受動表現ではガ格を取ったり主語に立ったりする場合は動的状態の持続という意味のほか、静的状態の持続という意味も表現することができる。なお、後者については 3.3 において取り上げることとする。
- 14 アンケート調査の結果によると、受動表現に用いられる場合、＜テイル＞は静的状態を表わすとされるものもあれば、動的状態と静的状態のどれなのかを判断しにくいとされるものもある。例文の 2 と 24 のデータを参照されたい。もちろん、動詞によっては「進められている」「発展されている」などのように、動的状態だけを表わすとされるものもある。この点については、中畠孝幸 1999・飯嶋美知子にも記述があるので、参照されたい。
- 15 早津恵美子 1990 によれば、「掛ける」は「掛かる」という自動詞があるから、有対他動詞としてその受身表現の使用頻度が低い。一方、「書く」は無対他動詞として対応する自動詞がないから、その受身表現の使用頻度が高いということである。
- 16 「好」は形容詞だが、動詞の後に来る場合は、補語として用いられる。
- 17 「了」は文中のほか、「往黒板上写好字了（黒板に字が書いてある）」のように目的語の後にも来ることができる。さらに「往黒板上写好了字了（黒板にもう字が書いてあるよ）」のように「了」が文中にも文末にも共に生起することができる。
- 18 もちろん、「完」は動作過程における最終の段階にある終結の局面を表わし、

動作過程を視野に入れている。

- 19 受動表現は結果を表わすことができるが、ただ客観的な結果を表わすだけにとどまり、予想通りの満足の結果なのかどうかという視点は持たれていない。なお、この点については従来の研究ではあまり言及されていない。
- 20 李京保 2007 では<テアル>についてその意味用法から<存在様態文><結果状態文><行為経験所有文>の三種類に分類されている。<存在様態文>は「～ニ+～ガ+V+テアル」、<結果状態文>は「～ガ+V+テアル」、そして、<行為経験所有文>は「～ハ～V+テアル」の構造によって表わされるとされる。ただし、「作る」という動詞については、<存在様態文>にも<結果状態文>にも用いられているとされていることに対しては少し疑問を感じる。「作る」という動詞は多くの意味を持つ動詞として様々な意味を表わすが、どの意味が存在を表わし、どの意味が結果を表わすのかについて説明する必要があるのではないかと思われる。
- 21 原沢伊都夫 2002 では、「～ガ+V+テアル」と「～ヲ+V+テアル」という基本的な形式については統計的に分析している。194 例の中で、「ヲの 41 例に対しガの 153 例は、比率からするとほぼ 1 対 4 であり、ガによって表わされるテアルの優位性は動かしがたいものとなっている」(『静岡大学留学生センター』第 1 号 PP25～26) と述べられている。<ヲ>より<ガ>が優位だという点については、本研究のアンケート調査の結果によって確認することができる。
- 22 アンケート調査の結果における例文 9、11、15、16、22、31、33、37、38、44 では、受動表現に用いられた例である。ここでもヲよりガの方が自然度が高いということが示されている。
- 23 <テアル>は「動作主+目的語+V+テアル」という構造と「対象語+V+テアル」という構造に用いられるが、この節では「動作主+目的語+V+テ

アル」という構造を取り上げ、「対象語＋V＋テアル」という構造については別稿で取り上げることにする。

24 後述するように、「対象語＋V＋テアル」という構造も結果性があるが、「動作主＋目的語ヲ＋V＋テアル」と比べれば、前者は静的状態として定着したという結果性であり、動作主による動的状態の実現した直後の段階に達している静的状態になる直前の結果性ではない。それに対し、後者は静的状態として定着したという結果性ではなく、動作主による動的状態の実現した直後の段階に達している静的状態になる直前の結果性なのである。すなわち、静的状態になる直前の段階と直後の段階があり、「動作主＋目的語ヲ＋V＋テアル」はその直前の段階、そして「対象語＋V＋テアル」はその直後の段階に位置するものと考えられる。

25 従来の研究における二つの「着」があるという説はこの二つの用法に基づくと考えられる。ただし、「着」の動的状態から静的状態への切り替えの持続もできるという用法を有機的に考えれば、「着」は二つではなくて一つだという認識に至ると考えられる。

◎ ここに挙げた日本語の例文がセンテンスとして成立するかどうかについて、日本人話者（年齢 18 歳～20 歳、いずれも国立大学の在学学生である）にアンケート調査を実施した。

調査の基準は以下の通りである。日本語として非常に自然だと思うものは<○>、やや不自然な感じがするものの、言わないことはないと思うものは<?>、日本語としては非常に不自然でほとんど言わないと思うものは<??>、そして絶対誰も言わないと思うものは<×>と記入するように依頼した。以下それぞれその結果を示す。

- 1 壁に地図を掛けられている。
〔回答者 31 人：○3 人 ?4 人 ?? 12 人 ×12 人〕 A、誰かによって地図を掛けられているところだ。〔19 人〕 B、もうすでに掛けられたままになっている〔7 人〕。 C、A と B 両方の意味が取れる〔4 人〕。
- 2 壁に地図が掛けられている。
〔回答者 31 人：○25 人 ?4 人 ??1 人 ×1 人〕 A、誰かによって地図を掛けられているところだ〔2 人〕。 B、もうすでに掛けられたままになっている〔17 人〕。 C、A と B 両方の意味が取れる〔11 人〕。
- 3 壁に地図が掛けてある。
〔回答者 31 人：○28 人 ?3 人 ??0 人 ×0 人〕
- 4 誰かによって壁に地図を掛けられている。
〔回答者 37 人：○0 人 ?4 人 ??15 人 ×18 人〕
- 5 誰かによって壁に地図が掛けられている。
〔回答者 37 人：○28 人 ?6 人 ??3 人 ×0 人〕
- 6 誰かによって壁に地図を掛けられているところだ。
〔回答者 37 人：○1 人 ?5 人 ??10 人 ×21 人〕
- 7 誰かによって壁に地図が掛けられているところだ。
〔回答者 37 人：○24 人 ?9 人 ??3 人 ×1 人〕
- 8 誰かによって壁に地図を掛けられてある。
〔回答者 37 人：○0 人 ?2 人 ??18 人 ×17 人〕
- 9 誰かによって壁に地図が掛けられてある。
〔回答者 37 人：○18 人 ?14 人 ??3 人 ×2 人〕
- 10 誰かによってもう壁に地図を掛けられてある。
〔回答者 37 人：○1 人 ?4 人 ??13 人 ×19 人〕
- 11 誰かによってもう壁に地図が掛けられてある。

- [回答者 37 人 : ○21 人 ? 10 人 ?? 5 人 ×1 人]
- 12 部屋に入ってみると、A 氏が壁に地図を掛けているところだ。
[回答者 37 人 : ○24 人 ? 6 人 ?? 5 人 ×2 人]
- 13 A 氏はもう壁に地図を掛けてしまっている。
[回答者 37 人 : ○2 人 ? 7 人 ?? 17 人 ×11 人]
- 14 A 氏はもう壁に地図を掛けておいてある。
[回答者 37 人 : ○5 人 ? 10 人 ?? 13 人 ×9 人]
- 15 地図がもう A 氏によって壁に掛けられてある。
[回答者 37 人 : ○18 人 ? 8 人 ?? 5 人 ×6 人]
- 16 地図はもう A 氏によって壁に掛けられてある。
[回答者 37 人 : ○18 人 ? 15 人 ?? 3 人 ×1 人]
- 17 地図は A 氏によって壁に掛けられている。
[回答者 37 人 : ○26 人 ? 7 人 ?? 3 人 ×1 人]
- 18 地図はもう壁に掛けられている。
[回答者 37 人 : ○32 人 ? 4 人 ?? 1 人 ×0 人]
- 19 壁に地図を掛けてある。
[回答者 51 人 : ○7 人 ? 11 人 ?? 17 人 ×16 人]
- 20 もう壁に地図を掛けてある。
[回答者 51 人 : ○32 人 ? 9 人 ?? 4 人 ×6 人]
- 21 もう壁に地図を掛けられてある。
[回答者 51 人 : ○2 人 ? 7 人 ?? 14 人 ×28 人]
- 22 もう壁に地図が掛けられてある。
[回答者 51 人 : ○30 人 ? 8 人 ?? 6 人 ×7 人]
- 23 黒板に字を書かれている。
[回答者 31 人 : ○2 人 ? 8 人 ?? 12 人 ×9 人] A、誰かによって字を書

かれているところだ [17 人]。B、もうすでに書かれたままになっている [11 人]。C、AとB両方の意味が取れる [2 人]。

24 黒板に字が書かれている。

[回答者 31 人 : ○29 人 ? 1 人 ?? 1 人 × 0 人] A、誰かによって字が書かれているところだ [4 人]。B、もうすでに書かれたままになっている [14 人]。C、AとB両方の意味が取れる [11 人]。

25 黒板に字が書いてある。

[回答者 31 人 : ○30 人 ? 1 人 ?? 0 人 × 0 人]

26 誰かによって黒板に字が書かれている。

[回答者 37 人 : ○0 人 ? 3 人 ?? 15 人 × 19 人]

27 誰かによって黒板に字が書かれている。

[回答者 37 人 : ○30 人 ? 7 人 ?? 0 人 × 0 人]

28 誰かによって黒板に字が書かれているところだ。

[回答者 37 人 : ○1 人 ? 3 人 ?? 14 人 × 19 人]

29 誰かによって黒板に字が書かれているところだ。

[回答者 37 人 : ○25 人 ? 8 人 ?? 1 人 × 3 人]

30 誰かによって黒板に字が書かれてある。

[回答者 37 人 : ○1 人 ? 2 人 ?? 16 人 × 18 人]

31 誰かによって黒板に字が書かれてある。

[回答者 37 人 : ○23 人 ? 8 人 ?? 5 人 × 1 人]

32 誰かによってもう黒板に字が書かれてある。

[回答者 37 人 : ○0 人 ? 6 人 ?? 12 人 × 19 人]

33 誰かによってもう黒板に字が書かれてある。

[回答者 37 人 : ○20 人 ? 10 人 ?? 6 人 × 1 人]

34 部屋に入ってみたら、A氏は黒板に字を書いているところだ。

- [回答者 37 人 : ○18 人 ?12 人 ??6 人 ×1 人]
- 35 A 氏はもう黒板に字を書き忘れてしまっている。
- [回答者 37 人 : ○4 人 ?14 人 ??9 人 ×10 人]
- 36 A 氏はもう黒板に字を書き忘れておいてある。
- [回答者 37 人 : ○7 人 ?15 人 ??10 人 ×5 人]
- 37 字がもう A 氏によって黒板に書かれています。
- [回答者 37 人 : ○15 人 ?13 人 ??6 人 ×3 人]
- 38 字はもう A 氏によって黒板に書かれています。
- [回答者 37 人 : ○17 人 ?14 人 ??5 人 ×1 人]
- 39 字は A 氏によって黒板に書かれています。
- [回答者 37 人 : ○28 人 ?6 人 ??3 人 ×0 人]
- 40 字はもう黒板に書かれています。
- [回答者 37 人 : ○34 人 ?2 人 ??1 人 ×0 人]
- 41 黒板に字を書き忘れてある。
- [回答者 51 人 : ○6 人 ?9 人 ??13 人 ×23 人]
- 42 もう黒板に字を書き忘れてある。
- [回答者 51 人 : ○17 人 ?18 人 ??7 人 ×9 人]
- 43 もう黒板に字を書かれています。
- [回答者 51 人 : ○2 人 ?3 人 ??17 人 ×29 人]
- 44 もう黒板に字が書かれています。
- [回答者 51 人 : ○23 人 ?13 人 ??6 人 ×9 人]
- 45 泰子はそう言いながら、自分の車を止めてある場所に歩み去った。
- [回答者 51 人 : ○43 人 ?6 人 ??1 人 ×1 人]
- 46 泰子はそう言いながら、自分の車を止めてある場所に歩み去った。
- [回答者 51 人 : ○36 人 ?9 人 ??3 人 ×3 人]

- 47 泰子はそう言いのかすと、自分の車の止めてある場所に歩き去った。
〔回答者 51 人：○38 人 ? 8 人 ?? 1 人 × 4 人〕
- 48 通されたのは骨董品が並べてある造りつけの棚が二方にある部屋だった。
〔回答者 51 人：○48 人 ? 2 人 ?? 1 人 × 0 人〕
- 49 通されたのは骨董品の並べてある造りつけの棚が二方にある部屋だった。
〔回答者 51 人：○40 人 ? 9 人 ?? 1 人 × 1 人〕
- 50 通されたのは骨董品を並べてある造りつけの棚が二方にある部屋だった。
〔回答者 51 人：○34 人 ? 15 人 ?? 0 人 × 2 人〕

参考文献

中国語

- 北京大学中文系 1955・1957 级语言班编 1982 《现代汉语虚词例释》
商务印书馆
- 戴耀晶 1994 「现代汉语持续体“着”的语义分析」 邵敬敏主编《九十年代的语法思考》北京语言学院出版社
- 费春元 1992 「说“着”」 《语文研究》第二期
- 高橋弥守彦 2007 「動態助詞“～着”の用法について」 『大東文化大学紀要』第 45 号 <人文科学>
- 菅谷有子 1996 「「V-テイル」に対応する中国語アスペクト」 『小出記念日本語教育研究会論文集アーガイド』No.5
- 李临定 1986 《现代汉语句型》 商务印书馆
- 刘一之 2001 《北京话中的“着”(zhe)字新探》 北京大学出版社
- 吕叔湘主编 1984 《现代汉语八百词》 商务印书馆

- 石毓智 2006 「论汉语的进行体范畴」 《汉语学习》 第三期
- 王学群 2007 『中国語の“V着”に関する研究』 白帝社
- 吴卸耀 2006 《现代汉语存现句》 学林出版社
- 张 黎 2012 《汉语意合语法研究——基于认知类型和语言逻辑的建构》 白帝社

日本語

- 飯嶋美知子 2004 「結果継続表現の日中対照研究—「他動詞の受身＋テイル」と中国語の存在文、受身文—」 『早稲田大学日本語教育研究』 4号
- 奥田靖雄 1977 「アスペクトの研究をめぐって—金田一的段階—」 『宮城教育大学国語国文』 8号
- 江田すみれ 2013 『「ている」「ていた」「ていない」のアスペクト』 くろしお出版
- 金田一春彦 1950 「国語動詞の一分類」 金田一春彦編 1976 『日本語動詞のアスペクト』 むぎ書房
- 工藤真由美 1995 『アスペクト・テンス体系とテキスト—現代日本語の時間の表現—』 ひつじ書房
- 斎藤 茂 2012 「現代日本語のテアル構文の研究 内容の要旨」 『言語と文明』 10 麗澤大学大学院言語教育研究科
- 杉村 泰 1996 「テアル構文の意味分析—その「意図性」の観点から—」 『名古屋大学人文・科学研究』 第25号
- 寺村秀夫 1984 『日本語のシンタクスと意味Ⅱ』 くろしお出版
- 中畠孝幸 1999 「結果を表す構文について：テイルとラレテイル」 『三重大学日本語学文学』 10号

- 仁田義雄 1982 「動詞の意味と構文——テンス・アスペクトをめぐって——」 『日本語学』1巻2号
- 原沢伊都夫 2002 「理論と実践の結びつき：テアルの表現形式から」 『静岡大学留学生センター紀要』1号
- 藤井 正 1976 「『動詞＋ている』の意味」 金田一春彦編 1976『日本語動詞のアスペクト』むぎ書房
- 益岡隆志 1987 『命題の文法—日本語文法序説—』くろしお出版
- 吉川武時 1976 「現代日本語動詞のアスペクトの研究」 金田一春彦編 1976『日本語動詞のアスペクト』むぎ書房
- 吉川妙子 2012 『日本語動詞テ形のアスペクト』晃洋書房
- 李 京保 2007 「～テアル文の構造及び意味用法」『日本研究教育年報』11号 東京外国語大学

【謝辞】:本研究は日中対照言語学会月例会（東洋大学板橋校舎）で発表した原稿に加筆修正したものである。当日、司会の方をはじめ会場で発言された方々に厚くお礼を申し上げる。